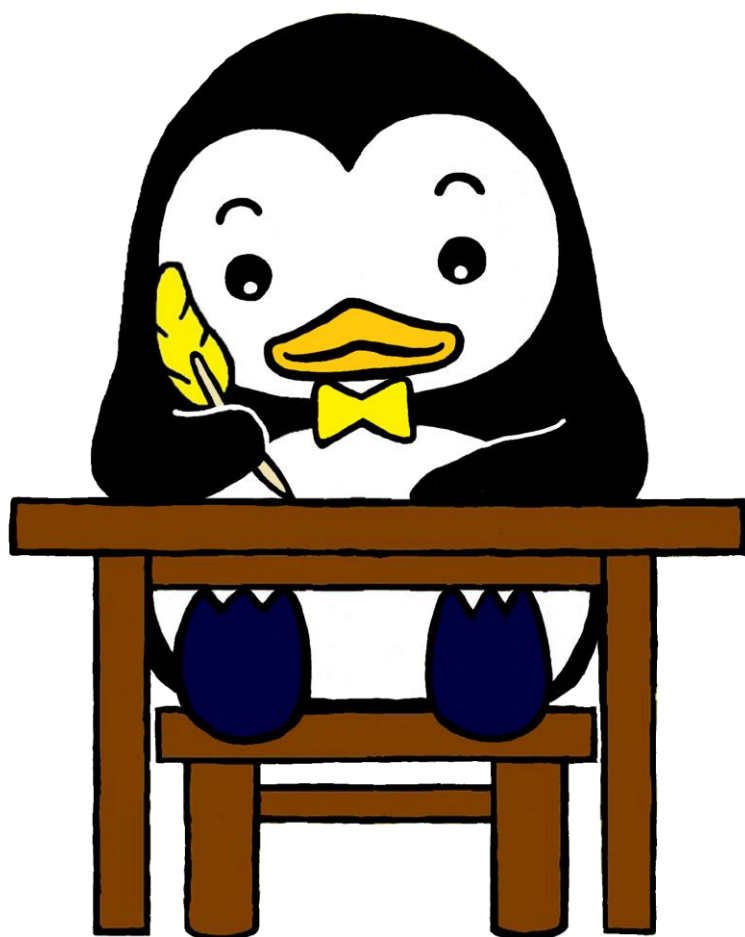


第75回“社会を明るくする運動”作文コンテスト

調布市推進委員会 優秀作品集



目次

間違えても大丈夫	調布市立調布中学校	一年	城所 凜	1
社会を明るくする運動く闇バイトとはく	調布市立第三中学校	一年	稲場 月季	3
誰かの当たり前が誰かを苦しめる	調布市立第三中学校	一年	柴田 莉紗	5
未来を見つめるルールの力	調布市立第四中学校	一年	伊藤 舞音	7
「あいさつ」は防犯カメラ	調布市立第四中学校	一年	中村 蒼志	9
人の気持ちに寄りそうこと	調布市立第四中学校	一年	村上 和誠	11
思いやりで繋ぐ明るい社会	調布市立第五中学校	一年	川村 安那	13
あいさつでつくる僕の町	調布市立第六中学校	三年	渡邊 僚哉	15
一人じゃないと思える社会に	調布市立第八中学校	二年	佐藤 華那	17
見えない世界の思いやり	調布市立第八中学校	二年	山岸 千華	19

間違えても大丈夫

調布市立調布中学校 一年

城所 凛^{りん}

私はあまり人と話したり、自分から話しかけるのが得意な方ではありません。話していても会話が弾まず、止まってしまうことがよくあります。ですが、中学生になってから「自分から何かを伝えること」を自信を持ってできるようになった気がします。

私が人に話しかけたり、話したりすることに自信を持つことができていなかったのは小学生の頃からでした。それは、自分の意見がみんなと違ったり、間違っていることを恥ずかしいと思っていたからです。「教室は間違えるところだ」なんていうことを先生がよく言っていました。がそれを聞いたたびに私は「間違えることは恥ずかしいことのはずなのに、どうしてそんなに自信を持って言えるんだろう」と思っていました。

その考えが変わったきっかけは学校での出来事でした。ある時、学校で「二学期を振り返って」というテーマで、作文の宿題が出ました。私は音楽祭のことを書きました。作文はそんなに不得意でもなかったので、普通に仕上げて提出をすることができました。

きっかけとなる出来事が起こったのは二学期の終業式でした。終業式が始まる前、体育館で待っているときに、突然先生に声をかけられ、「この間書いてもらった作文がすごく良かったから、三学期の始業式に全校生徒の前で代表として発表してもらいたい」と言われました。私はあまりにも急すぎてすぐに理解ができませんでした。が、「わかりました」となぜか了承してしまいました。私は終業式が終わったあと、あっさりと承諾してしまったことをとても後悔しました。一人のひとと話すのでさえ緊張してしまうのに、何百人もいる全校生徒の前で話すなんて絶対に無理だと思ったからです。ですが、出来事のおかげで私は大きく変わることができました。

長い休みが終わって三学期の始業式の朝、私はいつもよりも早く家を出て学校へ向かいました。代表になった人は少し早く学校に来てスピーチの練習をしなければならなかった。他の組の人も早く学校についていました。練習をしたときに声がうまく出るか心配でしたが、まだあまり周りに人がいないからなのか声を出すことができました。

そして本番、遂に私の番がやってきました。やはり練習の時とは違って舞台上がって正面を見ると、人が多くいて緊張しました。原稿を見ながら話すような感じだったの

で、文を忘れてしまうような心配はしていませんでしたが練習の時と同様、声がしっかり出るかが心配でした。緊張した足取りでマイクの前まで行き、少し深呼吸をしてから作文を読み始めました。読み始めた瞬間、ものすごい緊張が襲いかかってきました。「失敗してしまっただろうしよー」という思いで読み進めていきましたが、なんとか無事に読み終わることができました。読み終わって自分のクラスのに戻ったときは人生で一番安心した瞬間に思えました。

始業式が終わったあと友達が「上手に読めてたよ!」と、声をかけてくれました。先生も「早さもバッチリだったよ!」と言ってくれました。私はその時、「間違えることは恥ずかしいこと」という考え方が間違っていると思ひ直しました。なぜなら、もし私が今回のスピーチで失敗をしてしまったら、先生や友達は優しく声をかけてくれるだろうと思ったからです。これまで「失敗をして成長をしていくこと」を恥ずかしいことだと思っていた自分が逆に恥ずかしく思いました。

その出来事があったからは、私は失敗を恐れずに挑戦することゝ心をけました。例えば卒業式の誓いの言葉では、自分で考へた文章を保護者たちの前で読む、ということもしました。練習では緊張しすぎて文を忘れてしまったこと

もありましたが、「本番に向けてまだまだ練習をたくさんしよう」と、前向きに考へ、本番はミスすることなく言いきることができました。

これらの小学校での出来事のおかげで、中学生になった今は初めて会う人にも積極的に話しかけることができ、楽しく話せる友達もできました。私が伝えたいのは、「失敗を恐れずに何事にも挑戦することの大切さ」です。失敗をするのは恥ずかしいことではなく、むしろ成長するための大きな材料となることをいろいろな人にわかつてほしいと思います。



社会を明るくする運動く闇バイトとはく

調布市立第三中学校 一年

稲場 いなば 月季 つき

最近「闇バイト」という言葉を、テレビやネットニュースでよく見かけます。これは、犯罪と知らずに働いた人が実は大きな事件に関わってしまう、あやしいバイトのことです。

たとえば、SNSなどに「かんたんな仕事で高いお金がもらえる」「誰でもすぐにできる」と書かれていて、気になって連絡してみると、「この荷物をとってきて」とか「この家に行って物を受け取ってきて」と言われます。最初はアルバイトのつもりでも、それがじつは、詐欺や強盗などの犯罪だった、という事件がたくさん起きています。ニュースでは、10代の中学生や高校生が「知らないうちに犯罪に加わってしまった」というケースもありました。「楽にお金が手に入る」という言葉につられてしまった人もいます。

なぜ、こういうことが起きるのでしょうか。それは、今の世の中で「一人で悩んでいる」「将来が不安」「誰にも相談できない」という若い人が多いからだと思います。そう

いう弱くなった心に悪い人は、近づいてくるのです。「簡単にお金が手に入る」と言われたら、困ってる人ほど信じてしまいやすいのです。

だからこそ、「社会を明るくする運動」が大切だと思います。社会を明るくするというのは、事件や犯罪をなくすることだけではありません。困っている人がいれば声をかけたり、相談できる場所を教えてあげたり、お互いに助け合える社会をつくることだと思います。そして、それは、大人たちだけでなく、私たち中学生にもできることがあります。

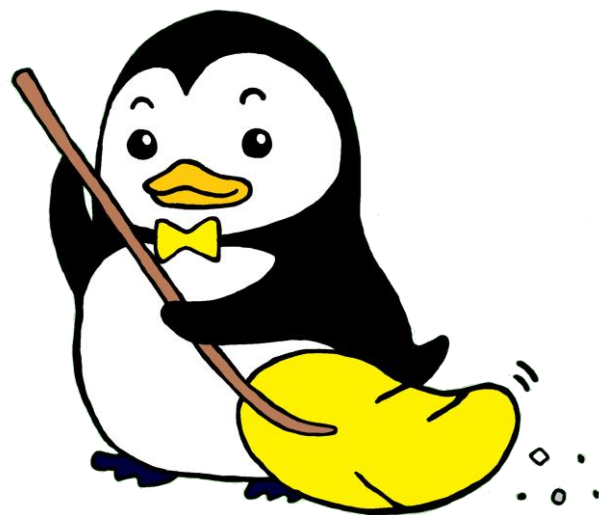
まず大切なのは、「あやしい仕事に関わらない」という強い気持ちを持つことです。楽にお金をもらえる仕事なんて、ほとんどありません。うまい話には必ず裏があります。知らない人からのメッセージや、身分証がいらないなどの言葉には、警戒しましょう。

次に、自分が困ったときは、かならず誰かに相談することです。親や先生、信頼できる大人に話だけでも、気持ちが少し楽になります。さらに、もし友だちがあやしいことに関わろうとしていたら、「それ、本当に、大丈夫？」と声をかけてあげること、とても大切なことです。

私たちが安心して生きられる社会は、そういう小さな行動の積み重ねでできていくと思います。「知らなかった」

では、すまない時代です。スマホやネットがある今だからこそ、自分で自分を守る力を持ち、まわりとも助け合いながら生きていくことが大切です。

私は、これからも身の回りに目を向けて、正しい行動を選べる人間になりたいです。そして、だれもが、安心して暮らせる、明るい社会をつくるために、自分にできることを考え続けていきたいと思っています。



誰かの当たり前が誰かを苦しめる

調布市立第三中学校 一年

しばた れいさ
柴田 莉紗

私たちは日々、当たり前だと思って生活していることがたくさんある。朝起きて学校へ行き、授業を受け、部活をし、友達と遊び、夕飯を食べること。それらのことは、多くの人にとって自然で特別なことではありません。けれども、その当たり前は、誰かにとっては決して当たり前ではなく、ときには大きな苦しみになることがあるのだと私は考えます。

たとえば、「部活で活躍するのが当たり前」「こんな基礎はできて当然」などを、できる人が運動が苦手な人に「やる気がない」と言えば相手を苦しめます。自分にとっては、当たり前で当然のことが相手にとっては、プレッシャーで劣等感につながってしまうのです。

「当たり前」という言葉は、よく考えるととても曖昧です。家庭の環境や価値観、健康状態、体質など人によって環境が違います。朝食を食べてくることが「当たり前」の人もいれば、忙しかったり、事情があって食べれない人もいます。両親がいて支えてくれるのが「当たり前」と思う

人もいれば、片親や祖父母と暮らしている人もいます。そうした違いを無視して「これくらいできて当たり前」「みんなやっているのが普通だ」と決めつけてしまうと、誰かを追い詰めてしまうことになります。

私は以前、「遅刻をしないのは当たり前」だと思っていました。けれども、ある友達が朝から家の手伝いをしていて、どうしても間に合わないことがあると知ったとき、その考えが一方的だったことに気が付きました。その友達にとっては、家の手伝いはとても大切でやらなければいけない事情があったのです。

私が「遅刻するなんて」と決めつけることは、その人の背景を知らずに傷つけてしまう行為だったのだと思います。

「誰かの当たり前が誰かを苦しめる」ということに気づくためには、まず「相手の立場で考えること」が大切だと感じます。自分にとって簡単なことが、相手にとってどれほど難しいのか、想像してみること。それができれば、安易に「普通はこうだ」と決めつけることは減るはずです。

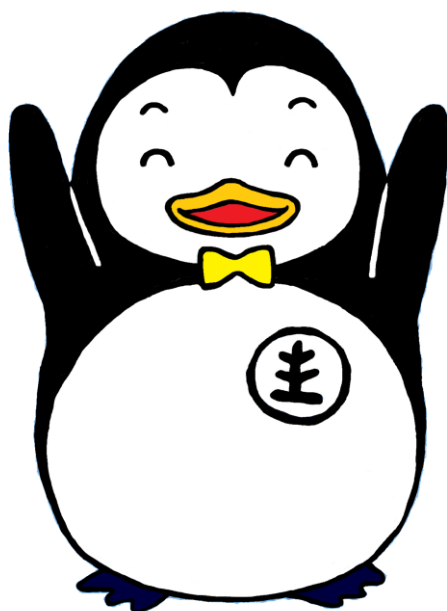
また、「ありがとう」「ごめんね」を素直に言えることも大切だと思います。自分の行動で相手が傷ついたと気づいたときは、素直に「ごめん」と謝ること。相手の努力や存在が自分の「当たり前」を支えてくれると感じた時は

「ありがとう」と伝えること。その積み重ねが、互いを尊重しあえる関係を作っていくのではないのかと、私は考えます。

社会全体を見ても、「誰かの当たり前が誰かを苦しめる」ことは多くあります。障害を持つ人にとって「階段しかない建物」は大きな壁になりますが、健常者にとってはそれが「当たり前前の構造」です。夜遅くまで働くのが「当たり前前」の社会は体を壊す人を増やします。男性が働き女性が家事をするのが当たり前前とされる考え方は、多様な生き方を選びたい人を苦しめます。つまり、社会の仕組みや考えの中にも、「誰かにとっての当たり前」が偏っている部分があり、それが弱い立場の人を追い詰めてしまうのです。

だからこそ、私たち一人一人が「自分の当たり前はみんなの当たり前ではない」と意識することが大切だと思います。違いを「大きな心で受け入れる」そして、互いに尊重しあえる社会を作ることができれば、「当たり前」によって苦しむ人は少なくなるはずです。

私はこれからも、自分の言葉や行動が「誰かを苦しめていないか」と立ち止まって考えられる人でありたいと思います。そして、相手の立場に寄り添い、「当たり前」を押しつけるのではなく、多様な「普通」を認め合える社会を目指していきたいです。



未来を見つめるルールの力

調布市立第四中学校 一年

伊藤 舞音
いとう まのん

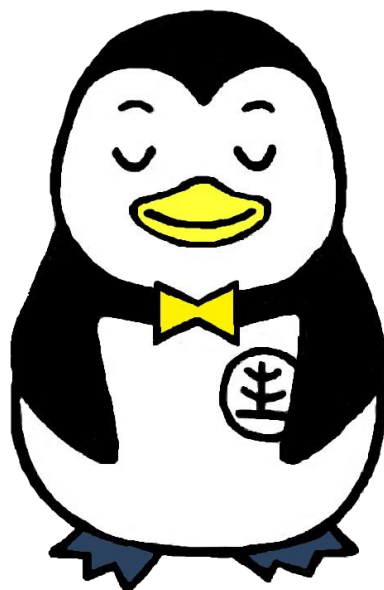
生活委員会である私は「ルールの呼びかけ」をしているとき、ふと「どうしてこのルールがあるんだろう。」と疑問に思ったことがありました。それまでは、ルールは「守るのが当たり前」としてとらえていましたが、その日をきっかけに、私はルールの本当の意味について考えるようになりました。

ある日、私がいつものようにルールの呼びかけをしていたとき、同級生に「そのルールってなんのためにあるの。」と聞かれました。私は答えに詰まってしまいました。今まで、ルールは「とりあえず守るもの」と思い込んでいて、あまり深く考えていなかったからです。しかし、その質問を受けてから、「ルールとは何のためにあるのか」を考え直しました。そして気づいたのは、ルールはただ人を縛るものではなく、みんなが気持ちよく、安全に過ごすための『思いやり』でできているということでした。たとえば、「廊下を走らない」という校則は、怪我を防ぎ、誰もが安心して学校生活を送れるようにするためのルールです。こ

れは、「スーパードライブでカーートを猛スピードで押さない」といったルールと似ています。どちらも、周りの人の安全や気持ち考えたものです。また、「制服をきちんと着る」という校則には、周りへの不快感を与えないことや、TPO（時と場所、場合）を学ぶ意味もあります。たとえば、もし誰かが結婚式にパジャマで来たら、場の雰囲気が乱れてしまうでしょう。これと同じように、校則にもきちんと理由があるのです。そして最近、私はルールを呼びかけるだけでなく、自分自身の行動にもより気を付けるようになりました。たとえば、誰かがルールを破っているのを見たときに、ただ注意をするのではなく、言い方を工夫したり、相手の立場を考えたりすることを意識するようになりました。さらに、ルールは学校の中だけでなく、地域や社会のなかにもたくさんあります。ごみの分別や、公共の場で静かにすることなどもその一つです。大人の中にもルールを守らない人がいて、そういうときこそ、子どもである私たちが正しく行動することで、周りに良い影響を与えられるのではないかと思いました。

私はこれまで、ルールとは「守るもの」だだけ考えていました。ですが、今は「みんなのための思いやり」だと考えるようになりました。ルールの本当の意味を知ることです、自分自身の行動にも責任を持てるようになりました。

これからも、ただ守るだけでなく、「なぜそのルールがあるのか」を考えることで、もっと気持ちのいい生活を送っていけるのではないかと思います。そして、もしルールを守れなかった人がいたとしても、どうして守れなかったのかを考えたり、もう一度やり直そうとしている人を助けたりすることも大切だと思います。ルールはみんなを守るだけではなくて、失敗した人がまた頑張れるように支えるものでもあると思います。これからも、なぜそのルールがあるのか、そしてそのルールがどんな未来につながっているのか、を考えながら、みんなが笑顔で過ごせる明るい社会をつくっていききたいです。



「あいさつ」は防犯カメラ

調布市立第四中学校 一年

中村 蒼志 なかむら あおし

私は、日常生活の中の防犯活動というものは、実は考えているよりずっと身近にあるのだと思います。

私が、そのように考えるようになったのは父の実家で祖母と話をしたことがきっかけです。

祖父母の家には、いつもたくさんの方が来ます。あいさつをして、雑談をして、特に何もせず帰って行きます。私は祖母に質問をしました。

「なんで、あの人たちは話だけをして帰るの。何かすることはしないの。」

すると、祖母は答えました。

「私たちはね、あいさつをしてお互いが元気か確認をしているんだよ。だから、この村の人のことは全員知っているし、もし知らない悪い人が来たら、すぐに分かっちゃうんだから。」

私は、日頃からのあいさつに、防犯活動のヒントがあると思っています。

一つは、お互いのことを知ることです。昔は、「向こう

三軒両隣」と言ったそうです。この言葉の意味は、自宅と道を挟んだ三軒、それから両隣の家のことを言います。なので、近所の人たちと助け合って暮らすことは、当たり前のことでした。

例えば、何か困ったことがあったとき、すぐに助けられるのは、遠くにいる親戚よりも、すぐそばにいる近所さんです。だから、ご近所さんや通学路の道中に住んでいる人とは、大きな声であいさつをして、自分の存在を知ってもらうことが必要だと思います。

もう一つは、お互いを知り合えば近所の目がお互いを守る防犯カメラになるということです。

最近、東京の街のあちこちに防犯カメラが設置されています。でも、すべての場所をカメラで監視することはできません。そこで役立つのが、近所の人たちの「目」です。

近所の人たちとあいさつをしたり、世間話をしたりして仲良くなると、お互いの家族構成や生活リズムをなんとなく知ることができます。

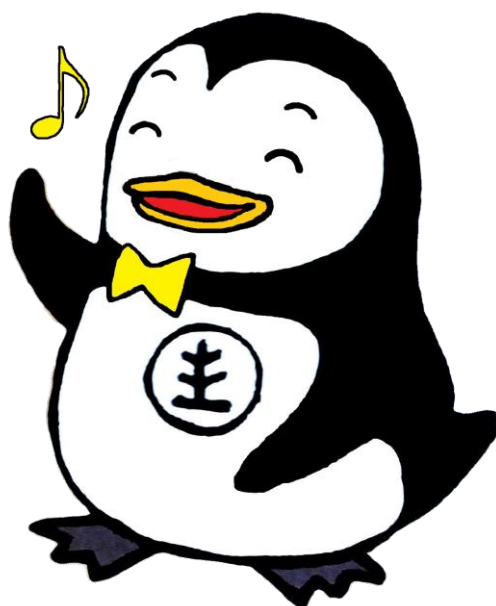
すると、知らない人が近所を何度もうろついている、いつも夕方には帰る人の家の電気が付かない、見たことがないトラックが家の前で作業している、など、「いつもと違うな」という異変にいち早く気付き、声を掛け合い、警察に通報することで事件や事故が起きる前に防げる可能性

があります。

近所の人が「地域の防犯カメラ」の役割を果たすことで、犯罪者が「この地域は防犯意識が高いから危険だ」と、犯罪を諦める効果も期待できると思います。

近所の人とのつながりは、防犯面だけではなく、地震や台風といった災害時にも大きな力になります。このように、私たちの身近な安全を守るため、とても大切な活動です。

今の時代は、あいさつをするとおどろかれることがあります。ですが、あいさつすることは、防犯面においてとても大切です。それが犯罪や非行の防止につながると私は思います。



人の気持ちに寄りそうこと

調布市立第四中学校 一年

村上 むらかみ
和誠 かずま

「どうしてこんなに辛い事件が、毎日のように起きるの
だろうね。」

と、家族とよく話すようになった。最近テレビのニュース
をつけると毎日のように犯罪や非行のニュースを見るよ
うになった気がする。毎朝このようなニュースばかり見て
いると、とても暗い気持ちになる。

ぼくは、母からこんな話を聞いたことがある。母がぼく
を妊娠中に母が電車に乗ったときのことだ。空いていたつ
り革につかまったら、目の前に座っていた女性が、マタニ
ティーマークのキーホルダーを見た直後に、急に目をつむ
って寝る素振りをはじめたそう。母は座りたいと思って
いたわけではないが、あまりの冷たさに寂しい気持ちにな
ったと話していた。しかし、別の日には、満員電車の中で、
少し離れた場所に座っていた男性が、

「ここどうぞ！」

と、わざわざ席を譲ってくれたそう。母は満員電車の中
で気を張っていたので、ほっとしてとても嬉しかったそう

だ。

みんなが同じ体験や思いを持っているわけではないの
で、本当の気持ちはわからないこともあるかもしれない。
けれども、自分のことだけを考えるのではなくて、少し周
りの人の気持ちを想像して寄り添ってあげると、優しい気
持ちで行動できるのではないかと感じた。

ぼくは空手の大会の決勝戦で、同じ道場の仲の良い友人
と戦うことになった。内心、仲の良い友人と戦うのは嬉し
くなかった。どちらかが勝って負けるのは、気が進まな
かったからだ。しかし、今まで一緒に精一杯練習してきた仲
だ。だから、気持ちを切り替えて、

「お互いに全力で試合をしよう。」

と声を掛け合って約束した。だから、本番は友人もぼくも
全力で頑張った。結果はぼくが勝ったが友人が会場の隅で
泣いているのが見えた。もしぼくが逆の立場だったら、や
はり辛かったと思う。うらみっこなしで試合をしたつもり
だったが「せっかく仲が良かったのに、これで気まずい雰
囲気になったらどうしよう。」とやはり少し心配になった。
しかしその友人は、

「優勝おめでとう。」

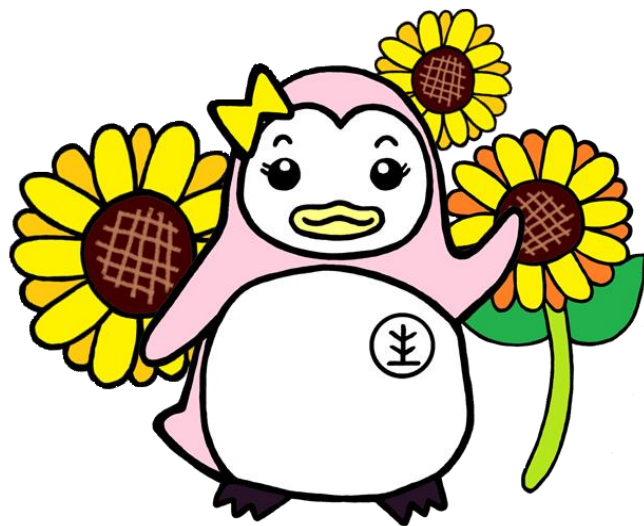
と言いに来てくれた。そのひと言で、緊張していた気持ち
が一気に軽くなった。それからは、一緒に記念撮影をして

盛り上がった。もしあの時に気まずい雰囲気になっていたら、ぼくの優勝体験は今でも辛いものになっていたと思う。お互いが自分の気持ちだけを見ずに寄りそいあったからこそできた、いい思い出だ。

今の世の中は、自分のことを考えることに精一杯になつてしまい、周りの人とのつながりやきずなを大切にする余裕がない気がする。

そうしていると、誰にも気づいてもらえない苦しみや寂しさを持った人が、それをひとりで抱えきれなくなった時に犯罪や非行に走ってしまうのかもしれない。だから、「周りの人の気持ちを考えて寄りそう。」その心をみんなが持つことが、犯罪や非行をなくす力ギなのではないかと思う。それが人と人との気持ちを結んで、相手の行動や表情の小さな変化や、心の中に抱えている辛い思いや苦しさに気づき、手を差し伸べあえるきっかけになると思う。そうすると、少しでもほっとしたり気持ちが和らいだりして、感情を押し殺したまま抱えきれずにはじけてしまう人も少なくなるはずだ。そして、犯罪や非行のない明るい社会になつていくのではないかと思う。

ぼくも、まずは学校の仲間や家族など身近なところから意識していき、みんなが前向きで明るい笑顔でいられる社会を作れる一人になりたい。



思いやりで繋ぐ明るい社会

調布市立第五中学校 一年

川村 かわむら 安那 あんな

「すみません、聞いてもいいかしら」駅のホームでおばあさんに話しかけられました。私はやっぱりと思い、すぐに「はい、大丈夫です。」と答えました。近くで立ち止まったり周りを見渡しているおばあさんを見て、もしかしたら道に迷ってしまったのかな、と気になっていたからです。声をかけてもらえて私自身もホッとし、無事に行き先を説明して、おばあさんを見送りました。

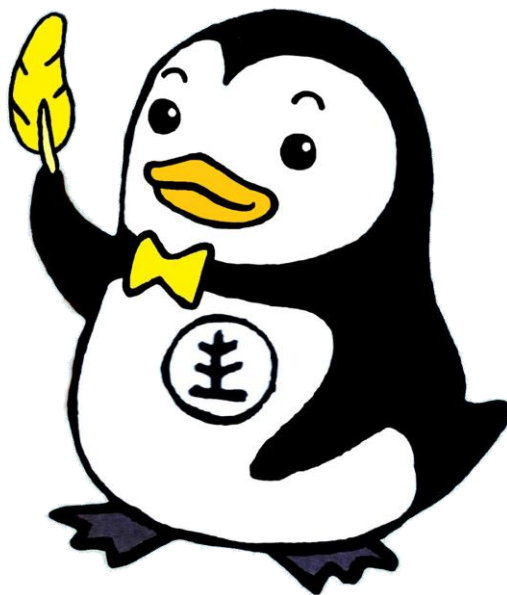
なぜおばあさんに気がつき、とっさに対応ができたかというと、前の週に私自身が同じ体験をしていたからです。私は習い事で初めて行く駅まで一人で移動することが多く、その時も目的の駅に着いたのですが、出口や乗りかえ改札がたくさんあり、どの改札を出て地上に出るか分からなくなっていました。とりあえず、近くの改札を出たのですが、どちらに進んだらいいか分からず、思い切った男女二人組のお姉さんへ声をかけました。お二人はとても優しく、行き先に一番近い出口まで一緒に案内してくださり、歩いている間も色々話しかけてくれました。最後は気

をつけてね、と私が見えなくなるまで見送ってくれました。こんなに優しい人がいるんだなととても感激しました。この体験をしてから、私も余裕がある時は周りをよく見て困っている人がいないかと考えるようにしていたのである。時おばあさんに気がつくことができました。この話を家族にするといい経験をしたよねと言ってくれました。でも気をつけてとも言われました。例えば、道を教えてほしいと話しかけられてそのまま車で連れ去られてしまったり、助けることが実際にある。だから相手をよく見て安全な場所かを判断してから行動してねと教えてくれました。人の温かさを身をもって体験をしたばかりだった私は、そんな人がいるのだろうかと少し納得ができませんでした。ですが母は、子供はまだ危機管理能力が未熟だからちゃんと見極めることができるまでは注意してほしいと言いました。親切を利用して犯罪をしたり騙したりする人がいることを前提として生活しないとならないのはとても怖く、きゅうくつで普通ではないと感じましたが、それでも日本は安全な国なんだと教えてくれました。

今回安全な社会について親と話したことで他の国について調べてみました。アメリカでは一般的に、十三歳未満の子供だけで街を歩いていれば子供達は保護され、その親

にはペナルティが課せられるそうです。また十四歳未満の子供は夜二十時から午前六時まで保護者なしでは公道を歩けないという条例がある州もあるということです。各家庭や個人がしっかりすれば良いわけではなく、条例として決まっていることにおどろき、それだけ犯罪が多いということにもショックを受けました。私は条例にあてはまる十二歳です。日本でもこの決まりがあったら私の習い事は続けられません。朝のランニングも習い事や塾に行くのも全て保護者の付き添いが必要になります。

今回体験した二つの出来事は、日本の社会がまだ平和で安全だからできたことかもしれません。そんな日本でも危機管理能力が未熟な子供の私は百パーセント安全に知らない人に親切にしたり力になってあげたりするのはおぼろかしそうです。ですが思いやりの気持ちを持ち続け、周りに無関心にならず、これから私にできる範囲で親切な対応をしていきたいです。私が理想とする優しい社会は、安心で安全で誰とでも知らない人とも何の心配もせず助け合うことができること、そして最も望むことは誰かの親切な気持ちが無切られたり傷つけられたりしない社会です。



あいさつでつくる僕の町

調布市立第六中学校 三年

渡邊 僚哉 わたなべ りょうや

「おはようございます！」

僕が毎朝学校に行くとき、一番最初に出会うのは、横断歩道前で立っている、サポートクラブの人だ。その人は、元気よく、明るく声をかけてくれる。僕もそれに応えて、「おはようございます」とあいさつをするのが、毎日の習慣になっている。

このやりとりは、もう、何年も続いている。最初のころは、ただあいさつを返すだけだった。しかし、今では「暑いから気を付けてね」と、ちょっとした会話を交わすようになった。僕が元気がないときは、心配の声をかけてくれる。その一言に、なんとなく気持ち軽くなって学校に向かう背中をそっと押してもらったような気がする。

このような関わりを通じて、僕は気づいたことがある。それは、「あいさつはただの礼儀でなく、人と人をつなぐ大切なきっかけである」ということだ。このつながりがあるからこそ、地域の中で見守りや助け合いが生まれるのだと思う。また、地域の人と日ごろからあいさつを交わして

コミュニケーションをとることで、自分のことを知ってくれている人がいるという安心感が生まれ、地域の人とのつながりを感じるきっかけにもなっている。

また、顔を知らない人や、見かけない人がいるときは「あれ？この人は誰だろう？」と自然に注意を向けるようになる。これは防犯の面でも重要なことだと思う。顔見知りが増えたと、町の雰囲気も変わってくる。誰かが困っていれば、声をかけられるし、何かおかしいことがあれば、気づくようになる。そうした小さな気づきや声かけが、犯罪や非行を防ぐ力に繋がるのではないかと思う。あいさつには、地域の人どうしをつなげ、「見守りの目」を広げる力があるのだ。

地域に見守りの目があるということは、悪いことをしようとする人にとっては、「誰かに見られている」というプレッシャーになるし、子どもたちにとっても、「誰かが見守ってくれている」と思えるだけで安心できる。

最近、ニュースなどで子どもが事件に巻き込まれた話を聞くことがある。そうした事件の多くは、人とのつながりが少なく、周囲から見守られていない環境で起きていると感じる。もし、地域の中で日ごろからあいさつを交わし、関係ができていけば、地域の小さな変化に気づくことができるはずだ。僕は、あいさつは、「地域の見えない防犯力

メラ」みたいなものだと思う。機械のカメラみたいに録画をするわけではないけれど、人の目や心が見守り、人と人のつながりが、安心と安全を守ってくれる。あいさつは、誰でもできるけれど、続けることは意外と難しい。でも続けるからこそ、信頼が生まれる。見守る人見守られる人。その間にあるあいさつは、まるで心の橋のようだ。その橋が地域にたくさんかかり、より強固な橋となれば、町は自然と安全で、優しい場所になっていく。

あいさつは、単なる言葉のやりとりにとどまらない。日常的に交わされるあいさつは、知らない人同士でも、心の距離をぐっと縮める力をもっている。この力は、地域の安全や安心を守る大きな力となり、犯罪や非行を未然に防ぐことにつながると信じている。そして、この力を持続させていくためには、僕たち一人一人の小さな努力が重要だ。あいさつの効果は計り知れない。あいさつを通じて地域の信頼関係が生まれ、地域の見守りが強化される。

だからこそ、僕はこれから積極的にあいさつをしたい。そして、あいさつをきっかけに、もっと多くの人とつながりを持ち地域社会を支える一員になれるように努力していきたい。あいさつを大切にすることで、僕たちの町をもっと明るく、安心してすごせる、大好きな町と胸を張って言える場所になると信じている。あいさつは、小

さな行動なのかもしれないが。しかし、その小さな行動が積み重なり、社会全体を変える力を持っている。

犯罪や非行のない地域社会をつくるために、特別なことをする必要はないのかもしれない。まずは、自分ができることから始める。それは、あいさつという小さな行動からだ。僕はこれからも、あいさつを大切にして、あいさつでつくる安心して暮らせる地域づくりに少しでも役立ちたい。



一人じゃないと思える社会に

調布市立第八中学校 二年

佐藤 華那 さとう かな

私は、テレビで犯罪や非行のニュースを目にすることがあります。最初は「どうしてそんなことをするのだろう」と疑問に思っていました。調べてみると、その背景には家庭の不和や孤独、感情のコントロールの難しさなど、さまざまな理由があることがわかりました。そうした孤独や不安を抱えたまま誰にも相談できず、間違った道に進んでしまう人がいるのです。つまり、犯罪や非行は孤独だと感じる心の隙間から生まれてしまうのではないかと思います。私自身も孤独を感じた経験があります。定期考査前、テスト勉強がうまくいかず、落ちこんでいました。そして、自分だけが遅れているように思えて、どんどん自分を責めてしまいました。

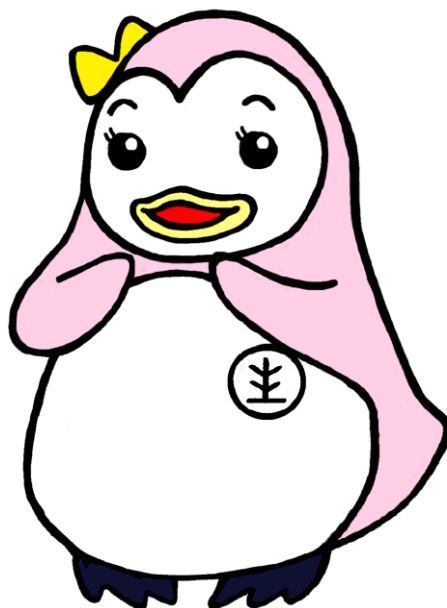
そんなある日、友達が「一緒に勉強しよう」と声をかけてくれました。そして、友達は私がつまずいているところを丁寧に教えてくれました。できるようになると「いいじゃん！」と励ましてくれ、その言葉に心が温かくなりました。また、自分の悩みを相談するきっかけになり、友達も

同じように悩みを抱えていることを知り、「一人じゃない人だ」と思えたのです。この出来事をきっかけに、前向きに勉強に取り組むことができました。私は、この経験を通して、人は誰かに支えられることで立ち直る力を持てるのだと実感しました。

また、私の地域では子供を見守る活動が行われています。地域の大人たちが、登下校の時間帯に通学路に立ち、あいさつをしてくれるのです。私は、その姿を見ると「この地域には、私たちを見守ってくれる人がいる」と安心します。毎日のように交わす「おはようございます」「気を付けてね」などの言葉は小さなことかもしれませんが、けれども、この積み重ねが「一人じゃない」という思いを生み出していると感じました。私は、このような身近な支えが、孤独を減らし、犯罪や非行を防ぐ力になっていると思います。社会を明るくするには、私たち一人一人ができる小さな行動が大切だと思います。あいさつをする、感謝の気持ち伝える、困っている人に声をかける、これらは誰でもできることです。私は、この積み重ねが周囲の人に安心感を与え、孤独を減らしていくと思います。社会全体が「支え合う」という志を持てば、犯罪や非行に走ってしまう人も少なくなるはずです。

「一人じゃない」と思えること、それは人の心を支え、

立ち直る勇気を与える力になります。孤独を抱える人に手をさしのべられるような社会であれば、犯罪や非行を減らし、誰もが安心して過ごせる未来につながるはずです。私もその一員として、「一人じゃないと思える社会」をつくるために、あいさつをする、困っている人に声をかけるなど、小さなことでもいいからできることを続けていきたい。



見えない世界の思いやり

調布市立第八中学校 二年

山岸 千華 やまぎし ちか

今や、私たちの生活に欠かせないインターネット。調べ物をしたり、友達と連絡を取り合ったり、便利で楽しいことがたくさんあります。時間や場所を超えて人とつながることができるのは、ネットならではの魅力です。

しかし、その一方で、顔を合わせないからこそ、相手の気持ちを想像しにくくなり、無責任な言葉を投げってしまう人もいます。表情や反応が見えない分、言葉の影響の大きさに気づきにくくなるのです。このように、ネット上には便利さの裏に潜むリスクがあることを忘れてはいけません。

私自身も、ネットの危険性を体験したことがあります。私が小学生の頃、クラスの男子と揉めてしまい、その後学年全体のグループラインで、私のことを悪く言う書き込みがされるようになりました。事実と異なることを広められ、何も知らない人はそれを信じこみました。私は目の前の画面に表示される言葉を見るのが苦しくて、グループラインを開くことも、学校に行くことも怖くなってしまいました。

だからといって、自分も言い返してしまったり、ますます大事になってしまおうと思い、どうしていいか分からなくなつて、すごく辛い気持ちになりました。

そんなとき、助けになったのは母や、仲のいい友達でした。母は、私の様子がいつもと違うのに気付いたのか、優しく話を聞いてくれました。友達は、自分も悪く言われてしまうかもしれないのに、グループラインで反対意見を言ったり、一緒に改善策を考えてくれたりしました。そのおかげで少しずつ気持ちが落ち着き、どう行動すればいいのかを考えられるようになったのです。また、ネットで検索してみると、同じように辛い気持ちをした人の体験談や応援のコメントがたくさん投稿されていました。それを読んで、「私は一人じゃないんだ」と感じ、心が軽くなったのです。今でも、私を救ってくれた母や友達、そしてネットで支えてくれた人たちにはとても感謝しています。言葉には人を深く傷つける力がある一方で、人を立ち直らせる力もあるのだと学びました。だからこそ、ネットの使い方には特に気を付けなければならないと思います。

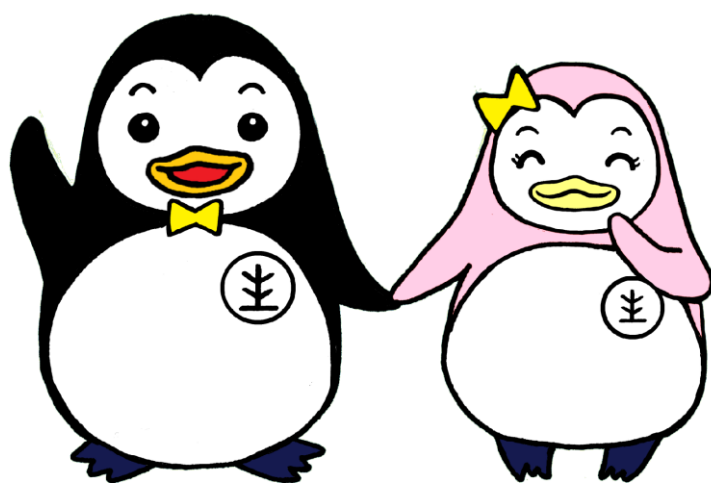
また、ニュースで見た出来事からも学んだことがあります。ある事件では、インフルエンサーの方が、ネットの誹謗中傷が原因で自ら命を絶つという事態が起きました。インフルエンサーは、顔や名前などの個人情報公開しながら

ら活動しているのに対して、誹謗中傷する人たちは匿名の個人情報を守られた安全圏から発言をします。この、匿名性こそがネットの良さであり、危険なところでは、ありのままの自由な思いを発信でき、多様な意見が集まります。しかし、自分のプライバシーが守られているからといって相手を思いやらない強い言葉が増えるのです。私は、匿名のネット社会での発信には、責任と気遣いが求められると思います。画面の向こうの、見えない世界を想像して、そのささいな言葉が人を傷つけてしまうかもしれないということを考えなければならぬのです。

「社会を明るくする」とは、一人一人が小さな思いやりをもつことから始まるのだと思います。あいさつをする、感謝を言葉にするなど日常の中の小さな行動の積み重ねが、人を笑顔にし、犯罪や非行を防ぎ立ち直りを支える明るい社会につながるのではないのでしょうか。

言葉には、人を追い詰めるほどの重さも、人を救い出すほどの強さもあります。その大きな力を正しく使える人が増えていけば、誰もが安心して生きていける社会に近づいていくはずです。





更生ペンギンのホゴちゃん，サラちゃん

“社会を明るくする運動”

調布市推進委員会